

The Membership of the National Museum of Modern Art, Kyoto



京都国立近代美術館 友の会会報

2004
AUTUMN
第1号



八木一夫 二口壺 1950年 京都国立近代美術館蔵

展覧会の



見どころ

没後二十五年

八木一夫展

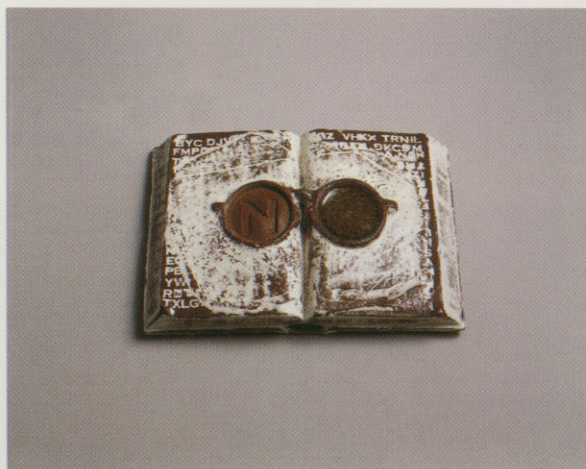
9月28日[火]—10月31日[日]

八木一夫 — わたしは茶碗屋

八木一夫は、多くの職種に分かれ、複雑に分業化された五条坂の焼物の町に生まれ育った。八木はよく「わたしは茶碗屋」と云ったが、それを云うとき、その「茶碗屋」という言葉は、己を陶芸家と呼ぶことへの照れ臭さ、ややねじれて見せたプライド、五条坂での八木家の職分、それらのものを総て含んでいながら、そのどれとも違う不思議なニュアンスを持っていた。晩年には滋賀県境の宇治・炭山に築窯し、制作をそこで行っていたとはいえ、生活の根拠地としては生涯、五条坂を離れなかった八木は、五条坂のことは、自らの皮膚や肉のように知悉していたし、彼の芸術も、総てそこに根拠を持っていることを、八木自身が一番よく知っていただろう。それは、宿命というような暗い認識ではなく、プライドというような大層な意識でもなく、まさに、京焼・五条坂の茶碗屋、八木一夫という自覚だったと思う。

すでに知られている通り、八木一夫は戦後日本の陶芸前衛運動の旗手となった一人である。1948年、彼と志を同じくする仲間たちと結成した『走泥社』は、長い間、前衛的な陶芸運動の代名詞のような存在であった。その後、いわゆるオブジェ（陶彫）の制作は、全国の窯業地の若手の作家や美術系の大学、短大の学生たちの間に広まり、毎日陶芸展、日本陶芸展、国際陶芸展など、多くの陶芸展が開かれ、そこには、八木らの運動に刺激を受けた、新しいスタイルの陶芸作品が多く出品された。

しかし、八木一夫の作品は、必ずしも前衛という観念に囚われたものではなく、何からでも、どこからでも発想できる柔軟な姿勢を保っていたし、それを手仕事のように愉しんでいた。文人画家の鉄斎が新聞の商品広告や三面記事、葉の能書きといったようなものまで、机の引き出しに大切に蔵っていたり、日本画家の福田平八郎が、枕元の眼鏡ケース、正月の餅、饅頭、梅干し、デパートの飾り物の造花などを、飽きもせず写生したり、そんな、一見彼らの芸術に何の影響ももたらさそうにもない事物に拘った態度と、八木の



八木一夫 ノー 1972年

作陶はどこか似ている。ある人の表現を借りれば、「繊巧な感情とインテリジェンスとが見事に交錯し、むしろ近代性を否定している」作家ということになるが、職人という京都の長い伝統を血肉とした前衛陶芸の、そこが大変興味深いところでもあり、同時に大変解りにくいところでもあろう。八木一夫には、「黒陶」と呼ぶ作品が多くあるが、これも、私たちの生活の場で、かつては当然のように使っていた炬燵が、そのヒントとなっているのである。温かな黒の色合いだけではなく、素材も製法も殆どを炬燵から取っている。だが、そこにも八木は、古代の中国で作られ、古代の遺跡から出土した「黒陶」という言葉のイメージのペダントチックで、荘重な効果を、ひそかに仕込んでいるのである。

八木一夫の亡くなった1980年3月、新聞や雑誌にいくつもの追悼文が出た。その見出しは、「造形の新境地へあくなき追求」（朝日）、「明確な思想を持った陶芸家」（毎日）「陶芸を超えた独創の芸」等々。冥界の八木一夫は照れた笑顔で、「えらいこっちゃなー。」と、つぶやいたかも知れない。

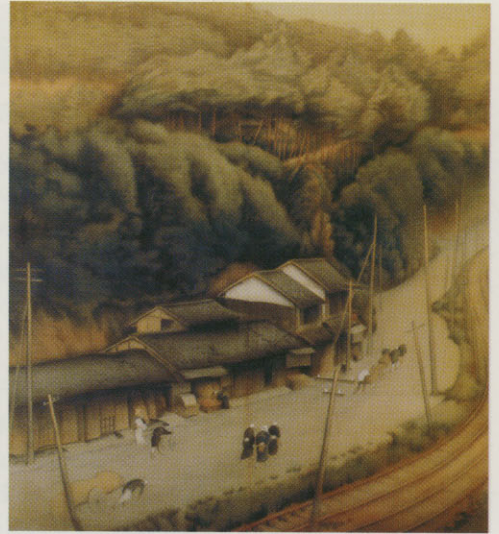
(R.K.)

暮れゆく街道 — 蹴上風景

地名は一般に、平凡なものでない。これはどう読むのか、どういう意味なのか、というふうに、奥の深いものである。「蹴上」は「けあげ」と読むが、昭和57年7月発行の『角川日本地名大辞典』によると、京の七口の一つ、粟田口の南東に湧き出たとされる泉「蹴揚水」（けあげのみず）に由来すると書かれ、続けて、『雍州府志』（黒川道祐著・1686年刊行）のものだとする、残酷な義経伝説を紹介している。その伝説によると、金売吉次に伴われて奥州へ下る義経らは、この地で美濃の侍、関原与市の一行に会う。与市の従者のひとりが、誤って泉の水を義経に蹴り掛けたことから、争いとなり、義経らは与市の従者十人ばかりを切り殺してしまう。そして、与市の耳鼻を切り落として追い払った。義経らは、これを旅の前途の吉兆として喜んだという。殺伐な話だが、都の出口であること、互いに武装集団であるらしいこと、戦捷の一つとして慶ばれていることなど、武士の世が来る前哨戦のようなリアリティーが感じられる。一方には、「蹴上」は、逢坂山へ向かっての急勾配であるため、人々がつま先で蹴りあげながら辿ったことに由来する名だという、至極まともな説もある。

さて、この作品「暮れゆく街道」だが、労働者や農民の苦勞多い生活をテーマに取り上げ、それを美しい自然を背景に、叙情的に表すという、大正時代の京都日本画の模範のような作品である。

街道はまさに、蹴上付近。旧国道一号線である。大昔から多くの旅人が、ここから都へ入り、ここから東国へ旅立った。画面上方は九条山、右手の軌道は、大正の初めに京都・大津間に敷設された京津電気軌道（大正末に京阪電鉄に合併され、ついこの間まで、この場所を走りつづけてきた）で、この緩い峠道を右へ左へと曲がりながら、山科へ向かう。前屈みになって街道を辿る人々は、おそらく、山科あたりの農家の人々で、京都の市内へ野菜や燃料を行商した帰りであ



神坂松濤 暮れゆく街道 1922年

ろう。街道を通る人のために日用品を売る小さな店や、宿屋、虚無僧の姿も見える。画家は街道を挟んで、右側の小高い丘（粟田山の斜面）から見下ろして、俯瞰的な構図で、この街道の夕べの一刻を画いたのだ。そこには、蹴上浄水場の赤いレンガの建築があり、その西の山腹には、都ホテルの潇洒な姿があるはずである。山端にへばりつくように画かれた四、五軒の家は、この作品が画かれた当時のまま、昭和四、五十年代まで、残っていた。

この作品の作者は神坂松濤（1882—1954）である。この作品を写生した場所に近い、南禅寺北ノ坊町に生まれた。兄に図案家神坂雪佳が、弟に漆芸家神坂祐吉がいる。菊池芳文に師事して日本画を習う一方、1905年には、聖護院洋画研究所に入って、浅井忠から洋画を学んでいる。この洋画の習得が、松濤に与えた影響は大きく、この作品にも見られるように、これまでの日本画には見られなかったような、立体感のある重厚な風景表現、洋画的な画面の構成、構図の作品が多く画かれた。それは、花鳥画の場合も同様で、従来の花鳥画に、新しい境地を拓くものであった。（加藤類子）

展覧会予告

ジャパニーズモダン — 剣持勇とその世界

10月8日(金)～11月3日(水・祝)

剣持勇は、ジャパニーズモダンというデザイン理念を提唱し、日本だけではなく海外でも高い評価を受けている近代デザインの草分け的な存在です。その業績を家具、室内装飾の図面、建築家との関係など、多角的に紹介する展覧会です。一階展示ロビーで開催されます。

友の会会員募集について

きばって見るのではなく、今日は河井寛次郎のやきものを観てこよう、長谷川潔の銅版画を久しぶりに観たい、帰りには1階の喫茶室でひと休みして、ミュージアム・ショップに寄って、というような気分になられたら、会員証を見せればいつでも、何度でもご入場いただける友の会をご利用くださると便利です。あるいは、特別会員や法人会員になって、美術館を少しサポートしてやろうという方も大歓迎です。いつでもご入会いただけます。友の会の会員には、次のような種類と特典があります。

□一般会員

年会費
特典

- 一般5000円／学生3000円
- ・常設展示が随時観賞できます。
 - ・京都国立近代美術館の企画展、特別展を観賞できます。(1回)
 - ・国立美術館(国立国際美術館・国立西洋美術館・東京国立近代美術館)の常設展示が随時観賞できます。また、国立国際美術館に限り、企画展を観賞できます。(1回)
 - ・京都／奈良国立博物館の常設展が団体料金で観賞できます。
 - ・ミュージアム・ショップの商品が割引購入できます。(一部除外商品もあります)
 - ・喫茶室(カフェ・ドウ505)利用に優待があります。
 - ・友の会会報、講演会、見学会等のご案内を送付します。

□特別会員・法人会員

年会費
特典

- 特別会員 20,000円／法人会員 1口100,000円
- 一般会員の特典の外、次の特典があります。
- ・常設展示の観覧券年間20枚(特別会員)／年間100枚(法人会員)
 - ・企画展の招待券を企画展ごとに2枚(特別会員)／10枚(法人会員)
 - ・特別招待状(展覧会のプレ・ビュー)を展覧会ごとに1通(図録引き換え券1枚進呈)(特別会員)／3通(図録引き換え券3枚進呈)(法人会員)※但し、図録引き換えは展覧会会期中のみ可。
 - ・法人会員には、図録を1冊送呈いたします。
 - ・京都／奈良国立博物館の常設展、企画展を団体料金で観賞できます。
 - ・美術館ニュース、友の会会報、ポスター・ちらし(ご希望の場合)を送付いたします。講演会、見学会のご案内を送付いたします。
 - ・その他、ミュージアム・ショップ、喫茶室等のご利用については、一般会員と同様です。

□募集期間

年間を通して、いつでも入会できます。

□申込方法

新規入会ご希望の方は、ハガキにご住所、ご氏名、電話番号またはEメール、FAX、生年月日、性別、学校名、勤務先、法人の場合は口数をお書きください、ご希望の会員の種類をお選びの上、事務局宛お送りください。会費は下記の郵便口座または銀行口座にお振り込みください。なお、美術館1階受付で入会手続きをすることもできます。

□事務局

京都市左京区岡崎円勝寺町 京都国立近代美術館友の会
電話：(075)761-4111／ファックス：(075)752-0509

□振込先

郵便振替口座：00940-7-189550／口座名：京都国立近代美術館友の会
銀行口座：みずほ銀行百万遍支店(普通)2338632/口座名・上と同じ

- 開館時間
午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)
 - 夜間開館
概ね4月から10月までの企画展開催中の金曜日
午前9時30分～午後8時まで(入館は午後7時30分まで)
 - 休館日
毎週月曜日(月曜日が休日に当たる場合は、翌日が休館)、及び年末年始
(開館時間、休館日は臨時に変更する場合があります)
- ※お車で越しの場合 岡崎公園駐車場(地下)をご利用の友の会会員様は、駐車場の割引(1台1名)を受けられますので、駐車券をお持ちの上お越しください。

●交通案内



独立行政法人国立美術館

京都国立近代美術館

The National Museum of Modern Art, Kyoto

〒606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町
TEL. 075-761-4111

テレフォンサービス 075-761-9900
ホームページ <http://www.momak.go.jp>